

えり子の風

内村直也



風の子えり

内村直也

shige.

実業之日本社

風の子りえ

定價 200圓

地方寶圖 210圓

昭和二十六年二月十五日發行

著者 内村直也

發行者 梅山 紘

印刷所 大洋印刷産業株式會社

東京都中央區銀座西一ノ三

發行所 實業之日本社

振替東京三二六番

目次

花の匂い	五
青空を映す瞳	三
信賴出来るもの	六
親友	九
音樂會	一〇
秋のバラ	二三

天 使……………二六

結 婚 申 込 み……………二六

胸 の 扉……………三六

夕 暮 れ の 街……………二六

装 幀 石 川 滋 彦

えり子の風

花の匂い

川島書館

風の強い日であった。

天から降ってくるように、花が風の中を落ちてくる。ちぎれた花瓣はあおられて、舞い上り舞い下りしながら、遠くにたゞよって行くが、御本体の花は、ばさり！　ばさり！　と緑の芝生の上に落ちて、そこでまた翻弄されてキリキリ舞いをする。

眞ッ赤なジニヤ(百日草)が落ちてくるかと思うと、紫のリンドウ、黄色いグラジオラスが落ちる。と思うと、白いエゾ菊……、色とりどりに各種各様の花々が、一定の間隔をおいて、一輪ずつ落ちてくる。——天から降ってきたのでない証拠には、みな、莖がついていて、それがキチンと同じ長さに鋏で切られているのだ。

(おや！……) 廣い居間の、ふっくらしたソファにすわって、戸外を吹く風をぼんやりと眺めていた園子は、不思議な落下物に、思わず腰を浮かせた。(麥ね！……) よく見れば見るほど、麥であった。

「お母さま、お母さま！」と隣室の母に声をかけた。

「お母さま……おかしいのよ！」

「なあに、園ちゃん？」つくろい物をしているらしい母の兼子の、のんびりとした返事が聞こえてくる。

「お二階の窓ガラス、開いてるんじゃない、お母さま？」

「そんなはずないでしょう。だいぶ前にあやが行ったんですもの……今日は風が強いから、お二階もよく見えてきて頂戴ってたのんだ時に……」

「だってお母さま、お二階からお花が落ちてくるのよ」

「花が……？」

「えい、お花よ」

「お父さまのお書斎も瑛一の部屋も、お花、けさ取り替えたばかりよ。花ビンだって、そんな吹き飛ばされるようなところへは、置きませんよ」

「そう……」と返事をしながら、園子は庭を見ている。ピンクのカーネーションが落ちる……白いユリが落ちる。——キリ／＼舞いをしていた花は、横なぐりの一陣の風に、さーっとばかり、庭の一隅で波を立てゝいる池の中に投げ込まれる。

「変ね、ばあやがいたすらでもしてるのがなア……」と口に出して言いながら、階段をのぼって行った。

瑛一の部屋は、扉が開いていて、誰も中に人がいないことは直ぐに分った。……窓はキッチンと閉まっていたが、花瓶には花が一本もさくっていない。

園子は父の書斎の扉をあけた。沈丁花の花を一輪、鼻の先に押しあて、半開きにした窓の方に向かって突っ立っているのは、兄の瑛一である。

「お兄さま、いっお帰りになったの？」

その言葉は耳に入らないのだろうか、なにか強烈な夢を追う人のように、じっと、花をおさえていたが、

「こんな、しつこい匂いじゃない！」と小さく言うと、（この野郎！）とばかりに、力まかせにぼーいと、沈丁花を窓から投げつけた。

「お兄さま、どうしたの？……氣がちがったんじゃないでしょうね」園子は笑いながら瑛一のそばに近寄って行った。

「お兄さま、どうなさったのよ！」

「ちがうんだよ、みんな……。全然違うんだ！」妹の方に振り返って瑛一が言った。

「なにが違うって？」

「……おれはあの時、たしかに花の匂いがしたと思ったんだよ。えり子さんの外套に包まれた時に……」

「……二階にある花をみんな嗅いでみたけど違うんだよ。えり子さんの匂いじゃないんだ。……もしかすると、香水の匂いだったのかな？ おい園ちゃん、お前、なんて香水つけてるんだい？」

「コテイのラ・ローズ・ジャスミン」園子は氣取って発言した。

「ローズ・ジャスミンっていうのはどんな匂いがするんだい」と瑛一は言うのと、乱暴に園子の片腕をにぎって、ぐいと引寄せた。よろめくように園子は兄に体を寄り添わせたが、再びぐーいと突放される。「ちがうちがう、全然違う。こんな人口的な甘っちょろい匂いじゃないんだよ。若い女性の肌からしみ出してくる、もっと自然な素晴らしい匂いなんだ」

「それじゃ、汗臭いのおんなじよ」

「バカを言え！ お前なんかになにがわかるものか！」

「だって人間の肌から出てくるものは汗で、その匂いは、つまり汗臭いってことじゃないの！」
調子のいい時は、大変可愛い妹であったが、一步間違えると、兄などは眼中にない戦後女性になる。

「お兄さま、今日えり子さんにお会いになったの？」からかう調子である。

「あゝ」

「それで、えり子さんの外套に包まれたのね？」

「あゝ、そうだよ」瑛一は得意然と答える。

「それで……、えり子さんが汗臭くって、その匂いにお兄さまがふら／＼としたってわけね、うふふふ……」と園子は笑い出した。

「お前なんかにはわからないんだよ！」と瑛一は後ろを向いてしまう。

「えり子さんてね、お兄さま、なにか普通の女の人の匂いと違うの？」

「違うさ、絶対に違うんだ！」

「へえ！ 絶対に違うの！……今度えり子さんに会ったら、あたし訊いてみよう」

瑛一は、父の机の上の煙草入れから、両切りを一本取り出して、火をつけた。

ちよっとの間、沈黙が続いた。急に瑛一は、二三ぷくしか吸わない煙草を灰皿の上でもみ消した。

「おい、園子、階下には花はないかい？」

「あるけど駄目よ。お兄さま捨てちゃうんだもの。……ここのお部屋の花、お母さまがけさお取りかえになったばかりなのよ。お兄さまって随分エキセン（異状）ね！ 捨てなくともいいと思うけ

ど、あたし……」

「……お前だって、これからいろんな、恋愛体験を積んでくれば、こういう氣持がわかるようになるよ」

「なあに、いやにしんみりしちゃったのね、お兄さま」

「……………」

「お兄さまそんなにえり子さんが好きだったの？」

「……自分でもはっきりは意識しなかったんだけどね、今日、えり子さんと横浜へドライブをして、オレはいままでにかつてなかったことを体験したんだよ。……したことは大したことじゃないよ。しかしオレにはもう、あのえり子さんの花の匂いは忘れることが出来ないんだ。オレはあの花以外の匂いは、みんなこの体から捨て切ってしまうたいんだ」

久保田瑛一が、えり子の外套に包まれて、花の匂いを嗅いだというのは、こういうことであつた。

その日の午前、たま／＼父の車が車庫にねているので、自分で運轉をしながら、なんということはなく、河村壯太郎先生の家を訪問してみた。先生には会えなかったが、先生の令嬢えり子をうまく連れ出して、横浜にドライブをしたのだった。

岩壁に立って、えり子は歌をうたう。その歌声は、鷗のつばさにのり、潮風に送られて、太平洋を

越えて行った。次第に、風が強くなってきた。えり子は、髪の毛を風になびかせながら、なおも歌いつづける。瑛一は、この女性にこういう面があったのかと、新しい発見をした喜びに、心はひどく愉しむ。

ふと彼は、煙草がすいたくなった。ライターのはどうしてもつかなかった。機械というものは不便なものである。……マッチをさがしてみると、棒がたった二本、しかもその中の一本は頭が半かけだ。

「久保田さん、あたし外套脱ぎましょうか」

「いや、脱がなくてもいいですよ」

「それじゃね、あたしが風よけの壁になるから、この中でつけてみましょうよ」

えり子は、胸のボタンをはずして、外套を廣く開いた。風がその帆をふくらませて、えり子は外套ごと吹き上げられてしまいそうだ。

「さあ早く早く、この中へお入りになってよ。もっと近く、ずっと近く！」

瑛一は、えり子の胸の下に小さくかぐむ。その上から、えり子の外套とそして手がやわらかくかぶさる。瑛一は、えり子の匂いをしみじみと嗅いだ。外には突風が吹きまくっているのに、彼は、えり子の外套に包まれて恍惚とした。

「久保田さん、二本一度に擦るの？」

「もちろんですよ。この一戦にすべてを賭けて……」などと、一應は言ってみたものの、彼はこの風の中で火をつける自信はなかった。なによりも彼にとっては、この瞬間が長く続くことが望ましかった。

「まだお擦りにならないの？」

「風の調子をみているんですよ。……あゝ、いまは静かな？」シュツと火花はたったが、煙草のさきまでは届かなかった。

「どうだったの、ついたの？……そんなにいつまでも下を向いてたんじゃわからないわ」

「もちろん駄目でしたよ」

「あゝ惜しかったわね、折角の煙草が……」

「煙草なんかもうどうだっていいんですよ。……お願いだからえり子さん、このまゝ動かないでいて下さい」

「どうかなさったの、久保田さん？」えり子は頭の上から心配そうに訊いた。

「……あなたは僕を信用していますね。僕って人間を……」

「もちろんだわ……」

瑛一にはこの信用が悲しかった。彼の日ごろの体験からいけば、こゝでえり子を抱き返すことは容易であつた。しかしそれがどうして出来ないのか自分にもよくわからない。たゞ素晴らしい花の匂いが彼を窒息させた、純潔で崇高な花の匂いが……。

伊勢佐木町へ出て、お茶をのみ、再びドライブをして、えり子の家へ送り届けたが、彼には、その花の匂いが、どうしても忘れることの出来ないものになつていたのである。

「あのえり子さんが、お兄さまの車に乗って、よく横浜まで行ったものね」

妹の園子は、不思議でたまらないといった顔で、兄に訊いた。——去年の夏、彼等の軽井沢の別荘にえり子親子が来た時のことを、園子は思い出してゐた。終始父の壯太郎の愛情の陰でのみ生きてゐる人のような印象が残つてゐた。

「うん、ちやうど彼女は、お姉さんの子供さんのことやなにかでクサクサした時だったんでね、その憂鬱を海の風で吹き飛ばしてあげましようって言ったんだよ」

「あの方って、あんな風に見えて、案外男の人と横浜ドライブぐらい平氣なのね……人は見かけによらぬもの……」

「いや……平氣は平氣なんだ。……しかもそれが生まれて初めてのことだつていうんだからね」

「初めて……？　横浜へ行くのが」くるりと振り返って、園子は訊く。

「いや横浜が初めてってことじゃないよ」

「もちろんよ。お兄さまのような、なにをするかわからないような男性と、行くことがよ」

「なにをするかわからない……そんなふうに見えるかい、オレって？」瑛一は、わりに素直に妹に訊いた。

「現場は見たことないけど、あたしの想像しているお兄さまって、そんな人よ」

「うふふ……」瑛一は苦笑をする。そしていかにも自分を戯画化するように、「そのオレがさ、なんにもしなかったんだからね……なんにも出来なかったんだからね……なんにもする氣にならなかったんだからね」

「チャンスはあったってわけね、いくらでも……」

瑛一はそれには答えようとせず、二三歩、窓の方に進みながら、

「絶対に信用をされてるってことは、おそろしいことだね。……僕って人間を信じきってるんだものね、えり子さんは」と言って、再び妹の方に向き直った。

「（えり子さん、あなたは僕を絶対に悪いことをしない人間だと信じているのですね）って言ったんだよ。そうしたら、（久保田さんて、そんなに御自分を悪い方だと思っていらっしゃるの？）っていうんだものね。……（僕はそれがつらいんだ、その信用が悲しいんだ。僕だって男なんですからね、